

今回のゴールデンウィークも、牧師家族は、私の実家に帰省してきました。岡山県は勝田郡勝央町というところですよ。非常に田舎です。サルは出ませんが、熊や鹿には遭遇するようなところですよ。敦賀の暮らしに慣れてしまえば、不便極まりないところですが、でも、朝方、ウグイスの鳴き声を聴きながら目覚めるのは、なんだか贅沢だなと思います。実家に住んでいた頃は感じなかった情緒を感じるようになったのは、確実に私も歳をとっていつている証拠ですね。大人になった私にも新しい魅力を憶える場所だったわけですが、子ども達にとっても、とくに長男の辰季にとって、非常に楽しい場所だったようです。私の地元である勝央町の隣には、奈義町という町がありまして、そこに化石の発掘体験ができる資料センターがありまして、3泊4日の滞在中、3日間このセンターに通い詰めて、発掘体験、と言うか、もはや発掘作業を続けて参りました。センターの人の話を聞いてみますと、福井の恐竜博物館にも研修に行ったり、協力関係を持っていたりするんだそうです。私の地元と福井の新しいつながりも発掘することもできました。

そんな慌ただしくも楽しい帰省となったわけですが、一つ、ややこしい出来事を思い出す機会がありました。私の祖母、辰季たちにとっては曾祖母、大きいお祖母ちゃんが、今から8年前の写真を嬉しそうに見せてくれました。どれどれと見てみると、それは、辰季が生まれて100日経った時に地元の神社で撮影した「100日参りの記念写真」でした。そこには、もちろん私も写っているわけで、そういえば、当時、揉める程はなかったけど、「これはあまり外部に漏らしてほしくない」と一言添えて、撮影した記憶があります。8年前と言えば、私は、前任地の倉敷教会で伝道師2年目の駆け出しで、新人であるが故の硬さと言いますか、実直さと言いますか、真面目さと言いますか、そういう良くも悪くも真っすぐな信仰を持っていた頃です。実家が、天台宗の檀家で、祖母は仏教系新興宗教である立正佼成会の会員で、台所と居間には神棚があって、奥の前には立派な仏壇があるという環境に、嫌悪感まではいかないまでも、「まあ、僕の方がはみ出したわけだから、文句は言えないよね」という諦め感を持ちつつ、過ごしていた時期です。そんな、そこはかとない居心地の悪さの上に、「神社の境内で記念撮影」と言うのは、当時の私にとっては、結構なストレスだったと記憶しています。別に、そうすることで神罰が下るとか、罪を背負うとか、そういう感覚はありませんでしたが、ただ、「私が、我慢しないといけないんだな」という理不尽さと言いますか、私の信仰は、実家では包んでおく必要があるんだな、という残念さが残りました。

そして、今回、立正佼成会の会員でありながら、神社の境内で撮影した記念写真を、嬉々として見せてくれた祖母を目の前にして・・・、そんなブレブレな信仰を持つ祖母を前にして・・・、「まあ、いいか」と思ったのでした。この「まあ、いいか」という感覚は、別に言葉にして説明する程の意味も価値もないものです。私が筋金入りの牧師であり、神学者であり、哲学者であれば、この異なる宗教間の融和や妥協ということについて、1万字くらいの論文を整えるところですが、そこまでの考察は面倒に思えますし、ただ、嬉しそうに記念写真を見せてくれる祖母を見て、「まあ、いいか」と感じた、その感情で十分なように思えたのでした。仏さんに助けを求めながら、神社や

神棚に祀られた神々にも親しくして、御年 90 を超える祖母が、今日も元気に過ごせるなら、まあ、それでいいかな、と。

こういう考え方と言うのは、ユダヤ教やキリスト教が、必死になって自らの生存とアイデンティティを確保しようと努力していた時代には、受け入れられないものであったかと思います。その時代には、宗教間でも国家間でも文化間でも、「負けたら死ぬしかない」という程の切迫感があったからです。異なる存在を受け入れ、互いに保護し合うという共通理解が全くなかった時代、あったのは野生動物と同じ弱肉強食と適者生存という厳しい競争環境です。宗教も、その原始的な競争環境から長らく抜け出せず、「自分が正しい」「自分たちだけが生き残るべきだ」という呪いに囚われてきました。確かに、そうした呪いのような激しい生存本能が、ユダヤ教やキリスト教の維持発展に貢献した事実も指摘できます。「こうしなければ、地獄に落ちる」「ちゃんとしないと神様に嫌われる」、そんな強迫観念が、強靱な原動力となって、教会を押し上げ、幼稚園を創り上げたことも認めないといけません。

でも、時代は変わりました。異なるものを受け入れ、違いを越えて手を取り合い、自分と相いれない存在の上にも神様の愛が注がれている事実に向ける、そんな時代になりました。この新しい時代を推し進めたのは、先日も起こった能登半島での地震などの自然災害や、ロシア・ウクライナ間の戦争や、コロナ禍のようなパンデミックや、経済格差や、豊かな生活を送るが故の、生きる悩みや精神的苦痛などなど、それらすべてを包括する「人間存在の危機」であったかと言えます。どんな宗教を信じるにしても、決して変わることはない「つらい」「悲しい」「さみしい」「残念」「幸せになりたい」「安らぎたい」という切実な感情や願いが、宗教の壁を越えて、理解し合い、受け入れ合う下地を整えてきました。「人は痛みを知ることで、優しくなれる」という月並みで手垢のついた言葉は、でも、間違いないと思います。

私たちは、「私たちの生きている世界には痛みがある」という真理を知ること、自分の信じている宗教を越えて、理解し合い、受け入れ合うことができるのだと思います。「痛みを知る」と言うのは、できればしたくない、避けたいことですが、でも、大事なことです。私も、「私の信仰が家族に理解されない」という痛みを知っているから、「では、どうしたら良いか」と建設的に考えることができました。大声で福音を語っても、それは解決しないことは、良く分かっていましたので、私は、そういう宣教はしていません。私は実家に対する宣教方針として、まあ、何の参考にもならないかも知れませんが、とりあえず、私が幸せそうに生きていること、私の家族が幸せそうに暮らしていること、適度に愚痴も漏らし自分に優しくしていること、嬉しかったことを素直に伝えて日々感謝していること。たとえ、自分の信仰が受け入れられていない事実があったとしても、でも、「まあ、いいか」と思って、柔和に接し、語り掛ける相手に益になるように言葉と表情を選ぶこと。そして、究極的には、「おまえみたいな生き方ってええな」と思わせるくらいの嫉妬を引き出すこと。何がつらいのか、何が痛いのか。その真理を知るからこそ、差し出し、示すことができる、精いっぱい優しいさと理解力を、私は努力していきたいと思います。

まあ、とは言え、努力ですので、その通りに行かないこともあるわけで。キリスト教の有名な詩である「フットプリント」「足跡」という詩が、立正佼成会のどこかの教会長さんの名義で、「仏の

教え」に作り替えられていたことを知った時は、さすがに祖母に対して「それは、違う！」と、割とキツめに言ってしまいました。まあ、でも、そうやって、ほかの宗教の美談を取り入れて、お互いに宗教物語が成立している、という聖書学的な見識もあつたりもしますが……。個人的に、「足跡」の詩は好きなので、安易な借用は避けてもらいたいという、こだわりは捨てがたいですね。難しいところですよ。

今日の説教題にしたのは、私の牧師仲間から聞いた話がもとになっています。大阪の教会で牧師をしていた、私の友人は、ある信徒さんから「年々、信仰が柔らかくなっている気がする」という相談を受けたんだそうです。その訴えとしては、「だから、嬉しいんです」ではなく、「だから、不安なんです」ということでした。確固とした信仰理解を堅持して生きてきたのに、日に日に、ゆるく崩れていく信仰に不安を憶えて、とうとう牧師に相談したということでした。そんな相談に対して、私の友人は、うまく助言できなかつたそうです。ただ、友人は「その柔らかさにも神様の御心があるはずだ」と。これは、まあ、牧師得意の逃げ口上だったかも知れませんが、「どんな不安にも優しい神様の御心が伴っているはずだ」と伝えたんだそうです。

硬く険しい信仰にも意味があり、柔らかく和やかな信仰にも価値がある、ということかと思えます。神様は、私たちに様々な信仰の種類を与えてくださいます。それは、きっと一人もはみ出させないための神様の配慮だと思います。この世界に、教会がいくつもあり、宗教がいくつもあり、それぞれの教会や場所で、救いを感じて生きている人がいるのは、すべて神様の深く広い愛の実現であると、クリスチャンの私は信じています。柔らかい信仰も、それはそれで、誰かを救うことがあると思えます。

今日の聖書箇所 38 節の御言葉を、ちょっと考えてみます。「わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている」。神様に導かれた十字架の上で、イエス様が見たのは、何だったのでしょうか。憎らしい群衆の醜態だったのか、それとも醜くも愛すべき神様の子どもたちだったのか。……。十字架にかかって尚、人々の赦しと救いを願い求めたイエス様に倣うことは簡単ではありません。イエス様の言葉を受け入れず、「イエス様を殺そうとしている」人々にさえ、それでもなお、愛は注がれていた事実を、私たちは知っています。そんな人々の罪をも背負って、痛みのうちに死なれたイエス様のことを、私たちは知っています。

信仰が柔らかいことは罪ではありません。と言いますか、イエス様ほどに柔らかくなることもできません。信仰の柔らかさは、自らの痛みを乗り越えた先にある、愛であるということも、少し頭の片隅に置いておきたいと思えます。そして、いつの日か、その柔らかい信仰と、柔らかい愛が、すべての人たちの救いと慰めとなりますように。心から祈るものであります。

お祈り致します。

神様。今日も、私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、心から感謝致します。日々、忙しくなく生きる私たちは、今日の礼拝において、ひと時の反省と安らぎの時を与えられて、あなたに心を向けることを赦されています。今日、私たちがここへ携えて来た一つ一つの祈りや願いに、御耳を傾け、御心に向けてください。信仰を持つからこそ避けては通れない、悲しみや苦しみもあります。どうか、その悲しみや苦しみにも、あなたの優しい御心が伴っていることを示してください。

い。私たちは、痛々しい十字架の上で、なお人々を慈しんでくださったイエス様の、その愛に倣って、歩んで参りたいと思います。そんな私たちの信仰の歩みの上に、豊かな祝福と恵みとを注いでください。あなたに連なる人生に、喜びと平安がありますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

### 5月誕生者の祝福祈祷

聖書：詩編 71 編 14～19 節

14 わたしは常に待ち望み、繰り返し、あなたを賛美します。15 わたしの口は恵みの御業を、御救いを絶えることなく語り、なお、決して語り尽くすことはできません。16 しかし主よ、わたしの主よ、わたしは力を奮い起こして進みいで、ひたすら恵みの御業を唱えましょう。17 神よ、わたしの若いときから、あなた御自身が常に教えてくださるので、今に至るまでわたしは、驚くべき御業を語り伝えて来ました。18 わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を、来るべき世代に語り伝えさせてください。19 神よ、恵みの御業は高い天に広がっています。あなたはすぐれた御業を行われました。神よ、誰があなたに並びえましょう。

神様。

私たちは、5月最初の聖日に、こうして5月生まれの方々のことを憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが母の胎内にいる時から、私たちのことを見つけ、今に至るまで導いてくださいました。この5月生まれの方々も、それぞれの人生において、あなたのことを知り、あなたに導かれてきたことを受け入れて、主と共に歩むものとされました。どうか、あなたを仰ぎ見つつ、その御心に従おうとされる方々を豊かな祝福で満たしてください。また、人は一人では生きてはゆけません。5月生まれの方々も沢山の人の支えられ、今という時間を歩んでおられます。この方々の周りにいる掛け替えのないご家族、ご友人の上にもあなたの恵みが注がれますように、祈ります。

この感謝と願い、尊き主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。